

幼児をいかに理解するか

—文部科学省『幼児理解と評価』を手がかりに—

圓 入 智 仁

How Do We Understand Infants?

—According to “Understanding and Evaluation of Infants”, by MEXT—

Tomohito Ennyu

1. はじめに

教育職員免許法施行規則には、幼稚園教諭の授与を受ける場合の教職に関する科目として「生徒相談、教育相談及び進路指導等に関する科目」が設定されており、その中に、「幼児理解の理論及び方法」という事項がある。これに基づき、幼稚園教諭の養成機関では、該当する科目を「幼児理解」や「幼児理解の理論及び方法」などの名称で開講したり、心理学系の科目として位置づけたりすることが、一般的になっているようである¹。

さて、「幼児理解の理論及び方法」とは、何を指すのだろうか。幼稚園で教諭が幼児を理解する際に意識するのは、心理学の知識や技術だけではない。幼児を理解するためには、家庭などその幼児を取り巻く環境、例えば保護者やきょうだい、親戚、ともだち、教師などとの人間関係を理解しなければならない。また、幼稚園における教育的、保育的な関わりに対するその幼児の反応、入園以来の経験を踏まえる必要もある。幼児の生育歴も把握しなくてはならない。これらのためには、心理学の他にも教育学、そして社会学、福祉学などの知見を活用することになる。

例えば、目の前の幼児が砂遊びをしながらお漏らしをしたとしよう。この場合、教諭として着替えなどの対応をしながら、考えるべきことがいくつかある。その幼児にとってお漏らしは珍しいことなのか、よくあることなのか。珍しいならばなぜお漏らしをしたのか。トイレに行くよりも遊びたかったのか、トイレに何か行きたくない理由があるのか、あるいは、尿意を催す前に何かの拍子で漏れたのか。お漏らしがよくあるならば、いつの頃からか、この1か月、1週間ではどうだったのか。どういう時や場面でお漏らしをするのか、それは共通しているのか、共通していないのか。お漏らしをした後の幼児の反応はどうか。遊び続けているのか、自ら報告に来たのか。お漏らししたことを隠そうとするのか、あつ

けらかんとしているのか。あるいは、家庭で夫婦げんかやきょうだいげんかがありそう、介護が必要な家族がいるなど、家庭内の状況が幼児のお漏らしという形で現れているのかも知れない。そもそも、教師である自分自身と幼児との人間関係はどうか。他にも保護者への報告や想定される反応など、考えるべきこととして挙げることができる。

このように幼児のお漏らしという現象を通して、教師は自らの保育学あるいは幼児教育学、それらに関連する諸学問の知見を総動員して、当該幼児に対する理解の到達点を確認し、さらに、今後の当該幼児への関わりを、改めて考えることになる。

さて、幼児理解の理論や方法については、膨大な研究蓄積がある。その中でも比較的新しい成果として、幼児理解の視点として保育者がどのような点に着目し、幼児の状態を理解するのかを明らかにした佐藤らの研究がある²。この研究から、保育者による幼児理解に関する知見を得ることができるが、加えて、現時点までの幼児理解に関する先行研究のレビューも丁寧に行っている点も注目できる。佐藤らによると、幼児理解あるいは子ども理解に関する先行研究は、幼児理解のプロセスを解明するもの、幼児理解の技量を高める手立ての検討、幼児理解の定義、幼児理解に当たっての視点など多岐にわたり、さらにそれぞれの研究関心の中でもその着眼点は多様であることを指摘している。保育者が目の前の幼児を理解するに当たっては、その幼児の、その行動だけを見るのではなく、あるいは、その幼児の発達や性格、心の動きだけでなく、幼児の行動の背景にある人間関係や家庭環境、地域社会などを踏まえるべきだと多くの研究成果が指摘していることは、看過できない³。

以上のことを踏まえて、本稿では文部科学省が「幼稚園教育指導資料第3集」として発行している『幼児理解と評価 平成22年7月改訂』における幼児理解について検討する。それによって、文部科学省が幼稚園教育にお

いてどのような幼児理解を期待し、あるいは、その方法や活用方法についてどのように考えているのかを明らかにしたい。もっとも、この冊子はそのタイトルから分かる通り幼児の理解と評価について具体例を挙げながら説明しているものであり、多くの幼稚園や幼稚園教諭が参考にしておりと推察する。この冊子の目次からは、幼児を理解してよりよい保育をつくりだすこと、教師の姿勢、幼児理解と評価の方法が叙述されていることが分かる⁴。

本稿でこの冊子における幼児理解を検討するに当たっては、上述の関心から、幼稚園幼児指導要録に関する部分と、実践事例に関する部分は対象外とした⁵。そして、見出しや事例を除く本文に172の段落を見出し、ここから「幼児」と「理解」の二つの言葉を含んでいる37の段落を抽出した。この段落の意味内容を考慮して、幼児理解の定義や方法、目的等に分類した。なお、「幼児」という言葉は「子ども」などに言い換えられている部分は見当たらないが、「理解」という言葉については、「把握する」など似たような言葉を使っていることがある。しかし、本稿では類似の言葉については検討の対象としない。

なお、引用頁と段落番号を適宜表記するが、前頁から続く段落については、当該頁の1段落目と数えることにする。

2. 幼児理解の定義

同書は幼児理解の定義について、まず、「幼児を理解するといっても、幼児の行動を分析して、この行動にはこういう意味があると決め付けて解釈することではありません。」(8頁1段落)と指摘している。その上で、幼児理解を以下のように定義している(同)。

幼児を理解するとは、一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指しているのです。

別の箇所では幼児理解を、「幼児の生活する姿からその子らしさや、経験していること、伸びようとしていることをとらえる」こととも説明している(25頁3段落)。これらを踏まえると、幼児理解とは、①幼稚園で生活している幼児と触れ合いながら、②幼児の言動や表情を観察し、③幼児が経験し、思い、考えていることを受け止め、④幼児らしさ、よさや可能性を理解しようとすること、以上の4つの要素から成り立つことが分かる。

3. 教育・保育の出発点としての幼児理解

幼児理解が教育や保育の出発点であることは、「幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めることです。」(3頁1段落)という文から確認できる。あるいは、「幼稚園における保育とは、本来、一人一人の幼児が教師や多くの幼児たちとの集団生活の中で、周囲の環境とかかわり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営みです。」(3頁2段落)と保育を定義した後で、次のように述べている(同)。

そのために、教師は幼児と生活を共にしながら、その幼児が今、何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、何を感じているのかなどをとらえ続けていかなければならないのです。幼児が発達に必要な経験を得るための環境や教師のかかわり方も幼児を理解することによって、はじめて適切なものとなるでしょう。すなわち、幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくるのです。

教師は幼児と生活を共にしながら、幼児を多方面から理解しなければならない。幼児に必要な環境整備、教師のかかわりも、幼児理解に基づくものである。このように、幼児を対象とする教育や保育の出発点が幼児理解であるならば、どのように幼児を理解すれば良いのか、その方法論を次に検討したい。

4. 幼児理解の方法

幼児理解の方法について、上記「1. 幼児理解の定義」で確認した①から④の順に、検討していこう。

(1) 幼稚園で生活している幼児との触れ合い

幼児理解には、幼児との触れ合いと、幼児のありのままの姿を受け止めることが必要であることが、以下の文から確認できる(41頁3段落)。

幼児を理解するために、取り立てて難しいことが必要わけではありません。保育の中で幼児と触れ合いながら、ありのままの姿を受け止めていくという、ごく日常的な教師の行為が大切なのです。そこには幼児との触れ合いを心から楽しむ教師の姿勢がなくてはならないでしょう。自分たちと一緒に生活を本当に楽しんでいる教師の下では、幼児一人一人が安心して伸び伸びと遊び、自分の世界を広げていくことができるの

です。

幼児理解に「取り立てて難しいこと」は必要ないというが、これは、難しい理論を振りかざして幼児の行動や発達を分析することではないという意味であろう。幼稚園教諭になるために修めた学問に関する知識や技術は幼児理解の前提であると考えて良い。これらを基本として、子どもたちとの触れ合いを求めている。

ただし、幼児との触れ合いにも注意が必要である。幼児と密着しすぎることの弊害を指摘する、以下の文章にそれが示されている(42頁2段落)。

触れ合いを通して幼児を理解するといっても、あまりその幼児に密着しすぎるとかえって見えにくくなる場合もあります。幼児の生活する姿は、教師との相互関係の中で生まれてくるものですから、教師が密着しすぎると枠がはめられて、幼児が自主性を発揮しにくくなることもあるのです。また、保育は、幼児が周囲の環境とかかわりを通して、自分の世界を広げていくことを支える営みですから、周囲の様々な状況との関連を大きく包み込んでとらえていかなければならないでしょう。

教師と幼児の相互関係を踏まえると、両者の密着によって教師による枠がはめられ、幼児の自主性が発揮しにくくなる可能性を指摘している。もっと広く、幼児が周囲との関わりを通して自分の世界を広げていくように導いていかななくてはならない。

また、「幼児と教師の相互理解は、毎日の生活の中で触れ合いを通して深められます。」(38頁1段落)や、「温かい視線を送ることが肌の触れ合いと同様に、幼児と教師の相互理解を深めるために役立ちます。」(38頁4段落)という文からは、幼児と教師の触れ合いから、相互の理解が深められるとしていることも読み取れる。

幼児理解は、教師が幼児を一方的に理解しようとするだけで成り立つものではありません。幼児も教師を理解するという相互理解によるものであると同時に、それは相互影響の過程で生まれたものであることを踏まえておくことが必要でしょう。(28頁2段落)

幼児との信頼関係の構築、また幼児との相互理解や相互影響の前提として、教師が幼児の立場に立つことの必要性を、「相手としての幼児を理解するということは、幼児の考え方や受け止め方をその幼児の身になって理解しようとする姿勢をもつことだといえるでしょう。」(32頁1段落)と指摘する。このように、幼児の立場になって、

幼児の考え方や受け止め方を理解しようとする努力を求めている。

教師には幼児の行動や心の動きを温かく受け止め、理解しながら、幼児との間に信頼関係を築くことが求められています。幼稚園においては、そうした教師と幼児の温かい関係が幼児の発達を促す上で重要な意味をもつことを踏まえて、保育を展開することが必要なのです。(4頁1段落)

このように、教師と幼児の相互理解の先には、相互の信頼関係の構築も期待している。教師と幼児が互いに理解し、影響し合い、信頼し合うことが、保育の展開には重要である。

さらに、「幼児との温かい関係を育てることそのものが、幼児を理解する過程」(29頁1段落)であるとも指摘する。「教師との温かい信頼関係の中でこそ、幼児は伸び伸びと自己を発揮することができるから」(同)である。「温かい関係を育てるためには、優しさなど幼児への配慮、幼児に対する関心をもち続けるなどの気持ちが必要です。そして、その気持ちを幼児に具体的に伝えることが大切です。例えば、名前を呼び掛ける、目が合ったときにうなずく、ほほえみ掛けるなどの小さな行為が大切なのです。」(同)と述べている。

(2) 幼児の言動や表情の観察

幼児と適切に触れ合いながら、幼児の言動や表情を観察することで、幼児理解の手掛かりを得ることができる。「表面に表れた幼児の言葉や行動から、幼児の内面を理解することは、幼稚園教育にとって欠くことのできないもの」(34頁1段落)である。

ただ、幼児の言動や表情を観察して幼児の内面を理解すると言っても、その前提となるのは、個々の幼児の発達の理解であり、それまでの生活環境の把握である(19頁3段落)。

その幼児にとっての活動の意味を理解するためには、一人一人の幼児の発達の筋道の中で、その意味をとらえることが大切です。これまでのその幼児の生活する姿の特徴を周囲の物や人との関係でとらえ、それと目の前の姿と関連付けてみることで、その幼児の活動の意味をかいま見ることができまます。

このことについて説明している、別の2つの文章も引用する(36頁2段落も同趣旨)。

一人一人の幼児にとって、活動がどのような意味を

もっているかを理解するためには、教師が幼児と生活を共にしながら、なぜこうするのか、何に興味があるのかなどを感じ取っていくことが必要です。目の前に起こる活動の流れだけを追うのではなくそれを周囲の状況や前後のつながりなどと関連付けて考えてみることで、その幼児の心の動きや活動の意味がだんだんと理解できるようになるでしょう。(17頁4段落)

幼児を理解するには、一つの場面や行動をとらえるだけでは十分ではありません。一つの行動の意味が、そのときには分からなくてもその幼児の生活する姿を長い期間続けて見ていくと、後で理解できたということはよくあることです。また、何かのときに幼児の思い掛けない一面が表れたり、入園の当初はおとなしいと思っていた幼児が緊張が解けてくると活発な面を表したりすることもよくあることです。幼児の持ち味や生活の変化は、教師が幼児と様々な場面で触れ合いを重ねる中で、徐々に理解されてくるものです。教師はあせらず、決め付けずに、日々心を新たにして、幼児一人一人への関心もち続けることが大切でしょう。(36頁3段落)

幼児の発達の筋道を丁寧に踏まえること、それは幼児の言動や表情、興味について、周囲の状況や前後のつながりを踏まえて理解することに他ならない。ただ、これらのことは「かいま見る」ことであり、「だんだんと理解」あるいは「徐々に理解」できるものである。「あせらず、決めつけずに」、教師が関心を持って幼児一人一人を観察し、理解しなければならない。

(3) 幼児が経験し、思い、考えていることの受け止め

幼児と触れ合い、観察することによって、幼児の活動や、思い、考えていることを受け止めることができる。

まず、幼児の活動の受け止めについては以下のように説明している(17頁1段落)。

一人一人の幼児に適切な援助をしようとするれば当然、その幼児にとって、今行っている活動がどのような意味をもっているかを理解することが必要です。活動の意味とは、幼児自身がその活動において実現しようとしていること、そこで経験していることであり、教師がその活動に設定した目的などではありません。そして、活動において幼児自身が経験したことがその幼児の内面的成長にどのように関係するのか理解することも大切です。

目の前の幼児が今、行っている活動の意味について、教

師が設定した目的とは別に考える必要性を説いている。その幼児が経験している活動が、その内面的成長にどのように影響を与えるのかを理解するということである。

また、保育を「幼児と教師の信頼関係を下にして、幼児が直面する自分自身の発達の課題を自分の力で乗り越えようとするのを援助する営み」(41頁2段落)と定義した上で、教師として、「言葉や行動の底にある幼児の気持ちを受け止め理解しようとするのが大切」

(同)であり、それによって、「幼児が自信をもって自分の課題を乗り越えようとする力を育てることにつながっていく」(同)ことを指摘している。このことは、「安易に分かったと思ひ込んだり、この子はこうだと決め付けたりしてしまうのではなく、幼児と生活を共にしながら、『……らしい』『……ではないか』など、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていこうとする姿勢が大切」(8頁1段落)という指摘とも共通している。

先に、幼児理解に「取り立てて難しいこと」は必要ない旨を指摘したが、以下の通り、幼児の内面を理解することを難しくとらえる必要がないという文章もある(34頁2段落)。

内面を理解するといっても、何か特別の理論や方法を身につけなければならないものではありません。幼児は、その時々を思いを生活の様々な場面で表現しています。一人一人が送っている幼児らしいサインを丁寧に受け止めていくことによって、幼児の内面に触れることができるでしょう。

もちろん、ここでも幼児教育学や保育学の他、幼稚園教諭としての学問的な知識や技術が不必要だと言っているのではない。それらを踏まえて、「幼児らしいサインを丁寧に受け止め」るため、日頃の気付きを大切にすべきであるという趣旨ととらえれば良い。例えば、次のような場面における対応である(35頁3段落)。

泣いている幼児に「何で泣いているの?」と声を掛けるのは大切なことですが、理由を聞いて分かることだけでは、内面を理解することにはなりません。(中略)泣かなくてはならないその幼児の心の状態をそのまま受け止めてみるのが最良の援助なのではないでしょうか。

泣かずにはいられない心持ちを、そのまま受け止めることが大切である⁶。教師としては幼児に泣いている理由の説明を求めてしまいがちだが、幼児にとっては、転んでケガをした、友達に嫌なことを言われたなど、説明で

きることがある一方で、幼児にも説明できない、漠然とした不安、恐れ、悲しさといったものもあるだろう。教師として、それまでの幼児の発達や周囲の環境を踏まえ、泣いている幼児をそのまま受け止めることも必要である。

(4) 幼児らしさ、良さや可能性の理解

これまでの幼児理解の方法の中で、幼児の発達の筋道を踏まえて活動を理解することを指摘した(2)と関連して、以下の2つの文章を見ておきたい。

幼児の発達の理解を深めるためには、教師が幼稚園生活の全体を通して幼児の発達の実情を的確に把握することや、一人一人の幼児の個性や発達の課題をとらえることが大切です。(8頁4段落)

発達の筋道のたどり方には、その幼児らしい特性があります。ある幼児は、運動機能に係る側面が早く伸びたり、他の幼児は、言葉の面の伸びが早く表面に表れたりします。また、ある面が伸びてくると他の面の伸びが目立たなくなるということもあります。発達する姿をとらえる際には、発達の様々な面には相互関連性や個別性があることを十分に理解することが必要でしょう。(22頁2段落)

幼稚園生活全体を通して、個別の幼児の発達の把握や、幼児の個性や発達の課題をとらえることが求められている。

5. 教師間の情報共有

幼児理解のために、教師間でのあらゆる場面における情報共有の重要性についても指摘している。例えば、次のような文章である(36頁6段落)。

幼児一人一人に対する理解を深めるためには、互いに支え合い学び合う教師の姿勢が重要です。幼児の姿についての語り合い、複数の教師によるチーム保育、学級・学年を超えた活動、職員会議や園内研修での話し合いなど、教師が連携する様々な場面があります。そうした場面で教師一人一人が参加関与し、保育のねらいや問題意識を共有することで幼児理解が深められます。

情報共有についての具体的な項目の例、あるいは情報共有することによるメリットを次のように説明している(37頁2段落)。

教師と幼児が出会ったときの状況、心の動き、変化や成長への気付きによって、教師一人一人の幼児に対する理解には違いが生じます。幼児の姿を担当だけでなく他の教師と共に振り返り、情報を教師が共有し重ね合わせ、幼児をより多くの目で見ることで、幼児の内面の理解や経験の質、発達に気付くきっかけとなるでしょう。

さらに、「教師が他の教師と様々に協働する場面を通して、他の教師と自分の視点との違いに気付き、そこから自分自身の幼児に対する理解や幼児とのかかわりを振り返ることが重要です。」(37頁3段落)とも述べている。他の教師との「協働」は、幼児理解と自らの振り返りにも有効である。

教師間の情報共有は、何も、研修などとして設定された時間だけで行われるべきではない(50頁3段落)。

一日の保育終了後に一日の保育の中でのエピソードを出し合いながら、教師間で幼児の見方や保育の考え方を交流していくことも大切です。さらに、こうした設定された時間だけでなく、教職員の日常的な会話の中でも幼児理解や保育の考え方について交流することができます。むしろ、改めて設定した話し合いではなく、日常的な会話の方が、自分の見方や考え方を素直に話したり、疑問に思ったことなどについてもあまり構えずに質問したりして、自由に話し合うこともできるかもしれません。こうした日常の話し合いが教職員間で活発になされることで、園内研修や保育終了後の話し合いが実り多いものとなっていくのです。

このことから、教師間の情報共有は、あらゆる項目について、あらゆる場面において実施されるべきであることを確認できる。

6. 家庭からの情報収集

これまで述べてきた幼児理解は、主に保育時間に取り組むことを想定しているはずだが、その手段として家庭における生活の把握も必要である。そのことは、次のように説明している(51頁1段落)。

幼児理解を深め、一人一人の幼児に適切に対応した保育を進めるために、家庭からの情報は大きな意味もっています。幼児にとっては、幼稚園と家庭は連続した生活の場として機能しています。当然、家庭での様々な生活の姿は、幼児の幼稚園での生活に反映されますし、幼児を取り巻く家庭の人々の感情や生活態度

が幼児の姿に微妙な影響をもたらすことがあります。いろいろな機会に幼児の家庭での生活の様子を把握して保育に生かしていく必要があるでしょう。

幼児を理解しようとするとき、園内での情報に頼っているとは不十分であることは言うまでもない。例えば、他児との遊びに活発だった幼児が、ある日を境に、他児との接触を避けるようになった場合、あるいは、おとなしく絵を描くことが好きだった幼児が、他児に対して暴言を吐いたり暴力を振るうようになったりした場合、その幼児に何かの変化があったことが想像できる。園内にその変化の原因があるかもしれないし、家庭に原因があるかも知れない。

このような変化に対する理解だけでなく、幼児の成長や発達等に関する、何か気になることがあるときも、家庭からの情報は何らかの示唆を与えるものになるだろう。

7. 幼児理解の活用

以上の方法論によって幼児を理解するならば、それをどのように活用することが求められているのであろうか。それは例えば、幼児の理解を踏まえ、幼児が「どのような方向に育ってほしいのか、そのためにどのような経験を積み重ねることが必要なのかを考え、教師の願いや見通しをもつ必要があるのです。指導計画を作成する際にもつ具体的なねらいは、このようなプロセスから生み出されてくるものです。」(25頁3段落)という文章から、幼児理解に基づいて「ねらい」を設定することが読み取れる。

また、「幼児を理解することは、教師のかかわり方に目を向けること」であり、「教師のかかわり方との関係で幼児の行動や心の動きを理解しようとするのが保育を見直し、その改善を図るために大切なこと」(9頁2段落)と説明している。「幼児を理解することも、評価することも、すべて教師が自分自身の保育を見直し改善するためのものといってよい」(25頁1段落)のである。

幼児がやりたいこと、かかわりたいことは何なのかを考え、その幼児にとってその活動を展開する意味を理解していくことが幼児一人一人の発達する姿をとらえることになり、また、その活動を通して幼児一人一人が発達にとって必要な経験を得ているかどうかという評価へとつながっていくのではないのでしょうか。そして、その視点が環境を再構成するなど、次の保育への手立てを考えていく上で欠くことのできないことなのです。(19頁4段落)

幼児を理解することが目的なのではなく、幼児理解を活用して、「ねらい」の設定、保育の見直しや改善が求められている。

幼児理解を踏まえて教師が保育の「ねらい」を設定し、それに基づいて保育を実践し、その実践を通して幼児が何を体験し、あるいはその実践が幼児の成長発達にどのように影響しているのかを理解し、さらにそれらを踏まえた次の「ねらい」を設定する、このようなサイクルの中に幼児理解は位置づけられる。

幼児を理解し、保育を見直していく際にはいつも、教師自身がつくった「ねらい」が念頭に置かれている必要があります。それを踏まえて、環境を構成するなどの必要な援助を改善していくのです。同時に幼児の姿から「ねらい」の再検討をしなければなりません。もちろん、幼稚園における「ねらい」は到達目標ではなく育つ方向性を示すものですから、一人一人の幼児が「ねらい」に向けてどのように育っていくのかを見ることが必要です。(26頁1段落)

「ねらい」を念頭に置いて保育に取り組み、幼児の姿を見て「ねらい」を再検討する。だからこそ、「教師が目の前の幼児をどのように理解するかは、教師自身の保育に対する姿勢や幼児の見方によって左右され」(28頁1段落)る。そして、「教師が幼児を理解し評価することは、そのまま自分自身や自分の行っている保育を理解し評価していることに気付かされ」(28頁5段落)る。だからこそ、「教師は自分自身に対する理解を深めるとともに、幼児と教師を取り巻く人々、状況などとの関連で幼児をとらえることが必要」(同)になる。

そもそも、「幼稚園における評価は、個々の幼児の心の動きや発達を理解することによってよりよい保育を生み出すためのもの」(47頁2段落)であり、「幼児を理解し評価する手掛かりの一つとして、幼児の生活する姿を記録に残すことが必要」(44頁1段落)である。

8. まとめ

本講で検討した通り、文部科学省『幼児理解と評価』によると、幼児理解とは、①幼稚園で生活している幼児と触れ合いながら、②幼児の言動や表情を観察し、③幼児が体験し、思い、考えていることを受け止め、④幼児らしさ、よさや可能性を理解しようとする、以上の4つの要素から成り立っている。

幼児との触れ合いは、教師から幼児に対する一方通行ではない。まして、教師と幼児が密着しすぎることも好ましくない。適切な距離感を採りながらの教師と幼児の

相互理解が必要である。

また、幼児の言動や表情を観察するにあたっては、その前提として、個々の幼児の発達を理解し、それまでの生活環境を把握する必要がある。目の前の幼児の行動を、それだけで理解するのではなく、それまでの生活の流れを踏まえなければならない。

幼児の経験や思考を受け止める際には、それが幼児自身の内面的成長にどのように影響したのかを理解しなければならない。それは、教師が予め設定した活動の目的と必ずしも合致しない。それぞれの幼児が、それぞれの経験を重ねて、成長しているからである。また、幼児にとって自分が経験していることを全て、教師に説明できるとは限らない。説明のつかない悲しさを感じることもある。教師はそのような幼児をそのまま受け止めることを求めている。

これらのことを通して、教師は、それぞれの幼児が、それぞれ幼児なりの成長発達を遂げているのであり、同じ幼児の中でも、ある側面と別の側面が均等に成長しているのではないなどといった特徴をきっちり踏まえ、幼児の発達やその課題、個性などをしっかり理解する必要がある。このように個々の幼児を理解することが、すなわち幼児の言動や表情を観察する際の前提となる。

ただ、幼児を理解するにあたって、教師は自分一人だけで取り組もうとするべきではない。他の教師との情報共有は大切である。しかも、それはわざわざ時間を設定して情報を共有することに加えて、他の教師との日常会話における情報交換も大切である。

さらに、幼児に関する家庭からの情報収集も重要である。同じ幼児でも、家庭での様子と園内での様子が違うことは珍しくないからである。あるいは、園での幼児の言動を、家庭の情報と照らし合わせて理解することで、幼児に対する視野が広がるのが考えられるからである。

このような幼児理解は、教師が自らの教育や保育を見直すきっかけとなる。幼児理解に基づく保育の「ねらい」の設定、「ねらい」に基づく保育実践、実践を通した幼児の経験、成長発達の理解、そしてそれらを踏まえた次の「ねらい」の設定へと、延々と続くことになる。このようなサイクルの中に幼児理解は含まれる。

以上のように、文部科学省の『幼児理解と評価』には、幼児理解をある幼児の、ある場面に限定するような立場ではなく、その幼児の成長発達の道筋という極めて長い視野に立っていることが確認できた。このことは、幼児理解に関するあらゆる研究においても意識することが必要である。

最後に、このような幼児理解を幼稚園教諭養成課程においてどのように教示することができるのか、考えてみ

たい。幼稚園教諭養成課程において、学生は幼児教育学や保育学あるいはそれに関連する諸学問に関する知識や技術を身につける。また、幼稚園教育実習において幼稚園教育の現場経験を積むことになる。

しかし、これらの諸学問は幼児教育や保育の前提であること、また教育実習は数週間で実施される、幼児理解の観点からすると極めて短い期間であることを考慮すると、幼稚園教諭養成課程において幼児理解を十分に教授することには限界があると言わざるを得ない。「だんだんと」、「徐々に」、「あせらず」幼児を理解するという時間的な余裕がない学生は、実習という短期的な視点で目の前の幼児を理解することになる⁷。

そうであるならば、学生には本稿で示した幼児理解の定義と方法、あるいは教師同士の情報交換や家庭からの情報提供などについて、できるだけ多くの事例に基づいて具体的に伝えていくことが実際的である。その際、本稿で議論した通り、「幼児を理解するために、取り立てて難しいことが必要なわけではありません。」、あるいは、「内面を理解するといっても、何か特別の理論や方法を身につけなければならないものではありません。」¹といっても、学生が身につける幼児教育学や保育学に関連する諸学問、「幼児理解の理論及び方法」を踏まえなければならない。

幼児理解を学生に教授するに当たって、新たに「幼児理解の理論及び方法」にかんする内容を学生に伝えるよりも、既に学生が関連する他の科目で学んだこと、そして実習で経験したことなど、学生が既に修めている知識や技術、経験を前提として、それらを幼児理解に関連づけ、応用するという方法が、より効率的かつ効果的であろう。

¹ 例えば、文部科学省における「幼稚園教諭の普通免許状に係る所要資格の期限付き特例に関する検討会議（第2回）」の配付資料3（別紙11）「幼稚園教諭養成課程における授業科目シラバスの例」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/094/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2013/02/07/1330504_13.pdf, 2015年11月19日アクセス）を見ると、当該科目は「教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法」と一緒になった、「幼児臨床心理学」として設定されている。

² 佐藤有香・相良順子「保育者における幼児理解の視点」『こども教育宝仙大学紀要』第5号、2014年、29-36頁。他にも、香曾我部琢「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」（『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第59集第2号、2011年、53-68頁）も、幼児理解を含めた保育学の到達点を整理しており、有用である。

³ 例えば、蘇珍伊・香曾我部琢・三浦正子・秋田房子「保育・幼児教育現場における保育者の子ども理解の視点と研修ニーズ—園長・主任と一般保育士・教諭の比較を中心に—」中部大学現代教育学研究所『現代教育学研究紀要』2号、2009年、105-111頁。

⁴ 冊子の目次は以下の通りである。

第1章 幼児理解と評価の基本

1. 幼児理解と評価の考え方 (1)幼稚園教育の充実のための基本的な視点, (2)発達や遊びの連続性を確保するための視点, (3)幼児を理解し, 保育を評価するとは, (4)小学校の評価の考え方について

2. よりよい保育をつくり出すために (1)幼児を肯定的に見る, (2)活動の意味を理解する, (3)発達する姿をとらえる, (4)集団と個の関係をとらえる, (5)保育を見直す

第2章 適切な幼児理解と評価のために

1. 教師の姿勢 (1)温かい関係を育てる, (2)相手の立場に立つ, (3)内面を理解する, (4)長い目で見る, (5)教師が共に学び合う

2. 幼児理解と評価の具体的な方法 (1)触れ合いを通して, (2)記録の工夫, (3)多くの目で, (4)家庭からの情報

3. 日常の保育と幼稚園幼児指導要録 (1)指導要録の法的根拠, (2)指導要録の役割, (3)日常の保育と指導要録への記入, (4)小学校との連携

第3章 幼児理解と評価の実際(実践事例)

例1 保育を見直し, 次の日の保育をつくり出す, 事例2 記録や話し合いを生かす, 事例3 保育の記録から指導要録へ, 事例4 教師自身のかかわりに気づく, 事例5 よさや持ち味に触れる

参考資料(略)

⁵ 目次で言うと, 第2章第3節と第3章は, 本稿の対象としない。

⁶ 倉橋惣三「廊下で」, 『育ての心』, 刀江書院, 1936年(『倉橋惣三選集 第三巻』所収, フレーベル館, 37頁, 1965年)。

⁷ この点で考えると, 実習園において学生が1時間程度, あるいは半日や1日の設定保育(部分保育, 研究保育, 責任保育)をすることは, 本来の意味での幼児理解の上に成り立つものではなく, 目の前の子どもの直近の理解に基づく保育であると言わざるを得ない。ここから学生が学ぶこととは何であろうか, 再考が必要かも知れない。